

政略結婚相手のスパダリ社長が
執着溺愛してきます

プロローグ

「はああああ〜っ」

私は重く暗い溜息をつき、ワインを一気飲みしてカウンターにグラスを置いた。

今夜は——明日から夏のバカンスが始まるということもあり、友人とヴェネツィアにあるバーカ
ロで飲んでいる。

ここは立ち飲み居酒屋ではあるが、お酒やおつまみが安くて美味^{おい}しく、とても居心地がいいので
気に入っている。でも今はそんなお気に入りの場所でも、私の心はちっとも晴れない。

『ちよつと、カリナ。いい飲みっぷりだけど、最初から飛ばしているとすぐ酔^よっちゃうよ。貴方、
お酒弱いんだから』

ツイードスカートと白のシャツを上品に着こなしている赤茶色の髪の美女——ウルスラが、灰色
がかったブルーの目をじっとりとこちらに向けながらイタリア語で声をかけてくる。

私は心配してくれている友人の視線を笑顔で躲^{かわ}してワインのボトルを持ち、先ほど飲み干したゲ
ラスに注ぎながら同様にイタリア語で返事をした。

『大丈夫、大丈夫。明日からバカンスなんだし、固いこと言わないでよ』

明日から二週間も休みがあるので、最悪一日酔いで潰れても問題ない。

私は目の前に置かれた茄子とハムのはさみ揚げをつまみながら、『ウルスラも飲んでよ』と促した。

『カリナ、飲み方がおじさんみたい。何かあったの？ 貴方、お酒は好きなほうだけど、いつもはこんな飲み方しないじゃない』

『……うん。別に。明日から休みだから、今日は飲みたい気分なだけだよ』

私はグラスが軋軋むくらい力一杯掴んでニッコリと微笑んだ。そして呷あるようにワインを飲み干す。その姿を見たウルスラが嘆息した。

『そっか。話したくないなら別に構わないわ。言いたくなかった時に教えて』

『……ありがとう』

心配してくれる友人に嘘をつくのは心が痛い。

私はウルスラの気遣いに嬉しさと申し訳なさなが縋ない交ぜになり、彼女にぎゅつと抱きついた。本当は嫌なことがあった。

数日前。大嫌いな父から電話がかかってきたことで、このモヤモヤが始まったのだ。

私は現在、イタリアのヴェネツィアで一人暮らしをしている。高校卒業後にイタリアの大学に留学して、そのまま大学院に進んだ。そしてヴェネツィアにある香料メーカーの研究員として就職した。その間、一度も日本には帰っていない。

そう。私はこのままイタリアで、父とは疎遠のまま一生を終えるつもりだったのだ。

「はあ……っ」

また重苦しい溜息が漏れ出る。

会社を経営していて忙しいせいとか、父は家庭を一切かえりみない人だった。早くから母と別居していて不仲だし、子供に対する愛情もない。そんな良好とはいえない生活の中で幼い私の面倒を見てくれたのは兄二人と——研究者である母方の伯父だった。

窮屈な実家が心底嫌で、いつも伯父の研究室で過ごしていたのをよく覚えている。だから私は分野は違えど、伯父と同じ研究者になりたいと思ったのだ。

私はお酒を飲みながら、思い出すと痛くなってきた頭を押さえた。

父はそんな私を疎んだが、兄二人が説得してくれたおかげで、イタリア留学を許してもらえた。が、就職まで許したつもりではなかったのだろう。数日前、父は「婚約が成立したから仕事を辞めて帰ってきなさい」と電話をかけてきた。

ぐつと唇を噛み締める。

またあの家に帰るの？ あの冷たくて暗い家に——

嫌だ。そんなの絶対に嫌。そのうえ、会社のために政略結婚をしるだなんて……

消化しきれない思いが、胸の奥をモヤモヤさせる。

私は胸元を掴みながら、かぶりを振った。そしてスマートフォンを取り出し、父をブロックする。こんなこと、いけないのは分かっているが、あの日から鬼のようにかかってくる電話は私の心を蝕む。気持ちの整理できるまで、悪いとは思うが父の電話には出たくないのだ。

私が苦虫を噛み潰した顔で生ハムに手を伸ばすと、ウルスラが私の背中をさすってくれる。優しい友人だ。

「はぁあゝっ」

その時、隣から先ほどの私のものと同じような重苦しい溜息が聞こえてきた。

視線を横に向けると、ハイブランドのスーツに身を包んだ日本人男性がいた。サイドとバックをタイトに仕上げ、清潔感のあるスッキリとした髪型をしているのが印象的なイケメンだ。が、その姿はこの場に似つかわしくなくて浮いている。

私は眉根を寄せて首を傾げた。

お金持ちそうなのに、こんな安い居酒屋でどうしたんだろう。何かあったのかしら？ ……まあでもやけ酒をするなら、こういう店のほうが気兼ねがないのかも？

私は彼も嫌なことがあったのだと決め込んで、日本語で声をかけながら彼の背中をさすった。それを見たウルスラが私の名前を叫ぶ。

「大丈夫？ 分かる、分かるよ。人生楽しいことばかりじゃないわよね」

「え？」

手に持ったワインボトルを直飲みしながら背中をさすってくる私を見て、その男性が大きく目を見開く。まさか声をかけられるなんて思っていなかったのだろう。

『やめてよ！ カリナ、離れなさい！ ご、ごめんなさいね。この子、酔っ払っているんです』

『いえ。声をかけてもらえると思っていなかったので嬉しいです。そのうえ慰めてくれるなん

て……感動しました』

私の腕をぐいぐい引っ張ってくるウルスラに、ニッコリと微笑む彼を指差して『この人、喜んでるよ』と笑う。

『そんなわけないでしょ！ 気を遣ってくれてるのよ！』

『えー、大丈夫だよ。よし！ 今夜は一緒に飲もう！ 私、貴方の話を聞いてあげる！』

『ありがとうございます』

彼が差し出してきたグラスに、手に持っているボトルで乾杯する。そんな私たちを見て、ウルスラが頭をかかえた。

『へえ。婚約者に逃げられたの？』

ジト目でこちらを睨んでくるウルスラを無視して、彼と話しはじめる。どうやら予想どおり、彼もつらいことがあったようだ。

『逃げられたわけじゃなくて、会える目処が立たないって言われたんです。……彼女は会社の利益が絡む結婚なんて嫌なのかもしれない』

『あら、嫌だ。最近、日本では政略結婚が流行っているの？』

時代錯誤だと思わないのかしら？

彼はお酒を呷りながらグジュツと鼻を吸り、流暢なイタリア語で話す。やや涙目だ。可哀想に。ふられたのね。

『よしよし、政略結婚は嫌がる人は嫌がるわよ。仕方ないわ』

次は会社の利益が絡む人ではなく、心から愛し合える人を探せばいいと思う。

私は、今にも泣き出しそうなくらい落ち込んでいる彼の背中をポンポンと叩いた。

『僕としては政略結婚のつもりなんてなかったんです。彼女は僕にとって初恋の人だから……。お会いできたら、まずは僕を好きになってもらう努力をして恋愛結婚するつもりでした』

『へえ、初恋の相手だったんだ』

『実は数年前に学会で研究発表をしている彼女に一目惚れして、彼女を必死で探したんです……。せっかく見つけ出して、親御さんの会社の利益になるようにと政略結婚を画策したのに、まさか拒否されるなんて……』

『いやだ、貴方。ストーカーっぽいところがあるのね』

『ちよつと、カリナ。失礼だってば』

というか、確実にストーカーじゃないか。

ウルスラに口を塞がれながらケラケラと笑い飛ばした私に、彼はしゅんとした表情で『本当にそうだから、笑って構いませんよ』と自虐的に笑う。そして私はただの興味から彼の想い人の名前を尋ねた。

『ねえ、その初恋の人の名前はなんて言うの？』

『彼女の名前はカリナ・アカツカサと言うんです。イタリアにいるって聞いて、居ても立ってもいられなくて、今日ヴェネツィアに着いたんですが……。土地勘もないうえに思いつきで来てしまったので手立てがなくて、ここでやけ酒をしていたんです』

『わあ、本当にストーカーだ』

『ちよつと、本当にやめて！ 貴方、飲みすぎよ』

ウルスラに頭を叩かれながらヘラヘラと笑う。でも、はたと動きを止めた。

ん？ カリナ・アカツカサ？

……赤司^{あかつかさ}花梨^{かりな}奈？

そう心の中で反芻^{はんそう}すると、一気に酔いが覚めてくる。

え？ 嘘。それ私の名前じゃないのよ。いやいや、同姓同名よね。きつと。ははは……

イケメンは嬉しそうに何事かをつぶやいているが、私は父の電話の内容を思い出して、酔いどころか血の気が引いた。

もしかして、目の前の彼が探している初恋の相手は私……!?

『あれ？ 急に固まってどうしました？ さすがに飲みすぎましたか？』

『ううん、大丈夫。ごめん、私……酔ったから帰る！』

『えっ!？』

背中をさすってくれる彼の手を振り切り、私は驚く二人を残してバーカロから逃げ出した。

彼は間違いなく父が言っていた政略結婚の相手だ。私ったら、なんてまぬけなの！ よりにもよって、そんな人に声をかけるなんて！

私は自分を責めながら住んでいるアパートに逃げ帰った——はずだったのに、なぜか気づくと彼に付き添われて病院にいた。

え？ 何があったの……？

「うう……」

頭が痛い。それに体中も……

私は痛みに呻きながら目を開き、二、三度瞬きをしたあと、見慣れない天井をしばらく眺めた。

「ここ、どこ？」

「ここは病院です。昨夜、貴方は店を飛び出したあとと思いきり転んで怪我をしたんですよ。結構な血が出ていたし、傷口の中にも微細な土砂などが入っていて、とても痛そうだったので、病院に連れて来たんです。お友達のウルスラさんはお医者さんだったんですね。助かりました」

ぼつりとこぼした日本語の呟きに、日本語が返ってくる。

「病院……」

彼の言葉を聞いても、昨夜、バーカロから飛び出したあとのことが思い出せなかった。彼は眉根を寄せて心配そうな表情で私の手を握っている。

そういえば、ここ……ウルスラの職場だ。そんなことを考えながら病室の中を見回していると、ウルスラに頭を小突かれた。

『どう？ 気分は？』

『全身痛いし吐きそう……』

『そりやそうよ。あんなにたくさん飲んだうえに、石畳の上でスライディングしたわけだし……』

石畳の上をスライディング……それはめちゃくちゃ痛そうだ。

ああ。だから、こんなにも体が痛いのか……

私はウルスラの言葉で得心がいった。

『よかった。目が覚めて、本当によかった』

私とウルスラのやりとりを聞きながら、心の底から安堵の声を出す彼に、私は戸惑いを隠せなかった。

いや、おそらく私は気を失っていたわけではなくて、お酒の飲みすぎで眠っていただけだ。というより、どうして彼がここにいるんだろう。

女医の友達がいるんだし、預けてさっさと帰ればよかったのに……

『あ、あの……』

『待ってください。頭も打っているんですから、急に起き上がったら危ないですよ』

私が体を起こそうとすると、彼が慌てて止める。そんな彼に戸惑い、ウルスラに助けを求めると彼女が溜息をついた。

『だから大丈夫よ……。何度も寝ているだけって言っただけで済んだけど。カリナはスライディングした時に負った脚の怪我と少しお馬鹿という点以外は特になんともないわ』

『え？ 馬鹿って言った？』

ウルスラの言葉にくわっと目を剥くと、彼女が私の腕を引っ張った。よろけながら立ち上がると、彼がすかさず支えてくれる。

『帰る前に簡単な診察をするから、こっちに来て。貴方はそこで待っていてね』

『はい』

『ウルスラ？』

診察なんていらなただけ……

そう思いながらも素直に診察室について行くと、彼女が後ろ手でドアを閉めた。そして声をひそめる。

『彼が探している初恋の人ってカリナのことでしょう？ だから昨夜、慌てて逃げたのよね？』

『え？ う、うん……そうみたい』

『とりあえず受付や会計は私がやっておいたから、フルネームは彼にバレていないわ』

『ありがとう』

『でもこのまま一緒にいたら、それも時間の問題よ。嫌なら早く彼と別れて、もう会わないことね』

私はウルスラの忠告に、何度も首を縦に振った。

私もそう思う。昨日は知らなかったから一緒にお酒を酌み交わせたが、真実を知ってしまったかには彼と一緒にいるわけにはいかない。昨夜の礼を伝えて、さっさと別れなければ……

『カリナさん！ 大丈夫でしたか？』

診察室から出ると、彼が気遣わしげな顔で近づいてくる。私は深々と彼に頭を下げた。

『はい。大丈夫です。ご迷惑をおかけしてすみませんでした。色々ありがとう。貴方も気をつけて帰ってね』

そう言って彼に手を振り、出口へ向かおうとすると、突然がしつと腕を掴まれる。

驚いたのと同時に、彼は流れるような仕草で私の腰を抱いた。

え？ 何？

『一人で帰るのはダメです。とりあえず家まで送らせてください。カリナさんは怪我をしているんですよ。頭も打っていて意識だ……』

『いいえ、意識なんて失っていないわ。ウルスラも寝てただけだって言っていたもの。本当に脚の怪我以外はなんともないのよ』

『それでも怪我人を一人では帰せません』

私が困惑すると、彼が私の手を引いて歩きはじめる。

ど、どうしよう……！

『ちょっと待って。本当にもう大丈夫だから……』

『カリナさんの気持ちは分かります。出会ったばかりの他人に家を知られるのが不安なんですよね。その防犯意識は立派です。そういえば名乗るのを忘れていましたが、僕はこういう者です』

彼は柔らかに微笑んで、顔をしかめて固まっている私の手にそっと名刺を握らせてきた。

そういうことじゃなくて、ここでお別れをしないとまずいんだけど……

長く一緒にいれればいるほど正体を知られる可能性が上がる。それだけは避けたい。私は困り顔でもらった名刺を確認した。

えつと……トモヒト・シチジョウ。へえ、海運会社の社長さんなのね。

「七條知仁しちじょうとむひとといいます。気軽に名前で呼んでください」

「はい。七條さん」

突然日本語で自己紹介してきた彼に、弾かれたように顔を上げる。私も日本語で返すと、彼が顔をずいっと近づけてきた。

ち、近い……！

「下の名前か愛称で呼んでください」

「……え？ あ……じゃあ、トモで」

そう言った途端、彼の顔がパアツと輝く。あまりに喜ばれて、今日を最後に呼ぶつもりがないとは言えなかった。

でもこの人、パーソナルスペースどうなっているのかしら。イタリア人は距離が近いほうだけど、そのイタリア人よりも近い。多分、距離感バグっていると思う。

「本当は僕の手で送りたいんですけど、ここはヴェネツィアですし、水上タクシーで帰りましょうか」

ヴェネツィアの街には網の目のように運河が張り巡らされている。なので、物理的に車での移動は無理だ。車が一台もない街。それがヴェネツィアなのだ。

私の腰から手を離さないトモに嘆息しながら、家に送ってもらうまでの辛抱だと自らに言い聞かせて、彼の提案を受け入れた。すると、彼が満足そうに微笑む。

嬉しそうな彼に、私は先ほどに続いて日本語で話しかけた。昨夜はお互いイタリア語で話していたが、実際どちら日本人だから日本語でいいと思う。楽だし。

「で、トモはやらなければならないことがあるんじゃないの？」

「ありません。花梨奈さんの安全が第一です……」

彼はとても責任感が強い人なのだろう。だから、知り合ったばかりとはいえ、目の前で怪我をした私を放っておけないのだ。

でも彼は、私を追いかけてくるほど好きだと言うわりには、私を見ても気づいていないみたいなのよね。

まあ所詮初恋。昔の話だ。学会での私を見て恋をしたのがいつかは知らないが、そういう時は今のようなかジュアルな服装ではないし、髪もアップにしてメイクもしっかりしている。おそらく雰囲気が違うから分からないのだろう。

結局はその程度の想いのよ。だから、今日お別れしても大丈夫……

「さて、帰りましょうか。お嬢様」

私の手を恭しく取って微笑むトモに、私もニツコリと笑った。

今はこの戯れを楽しもう。

「あ、待って。タクシーじゃなくて、水上ヴァポレットバスでいいわよ」

迷わず水上タクシーに乗ろうとするトモを制止する。が、彼は私の提案に難色を示した。

「いけません。貴方は怪我をしているんですよ」

「でも……」

まあ、タクシーのほうが早く帰れるからいいのかしら？

そうすれば、彼との時間も早く終わる。

引いてくれそうにないトモに、私がやむなく了承すると彼は満足げに微笑んだ。そして二人で水上タクシーに乗り込む。

「う……」

足元がゆらゆら揺れて、吐きそうだ。そういえば私、二日酔いだった。色々あって忘れていた。歩いて帰ったほうがよかったと後悔しながら下を向いて口を手で押さえていると、肩を抱かれ引き寄せられる。

「大丈夫ですか？ 真っ青ですよ。つらいなら、寄りかかってください。なんなら、膝枕をしましょうか？」

「いえ……ありがとう……」

寄りかかると確かに少し楽かもしれない。

とりあえず今は無理せずに頼ろうと思い、彼に寄りかかりながら目を閉じた。

ほどなくして、水上タクシーが自宅の近くに着く。私はトモに支えてもらいながら、タクシーを降りた。

「すみません。今の花梨奈さんの体調をもう少し考えるべきでした。船酔いしましたよね？」

「ううん、大丈夫よ。ありがとう」

私の肩に手を回して支えながら歩き出したトモに、ぺこりと頭を下げる。

お礼にお茶をご馳走すればいいかしら？ なんかいとお菓子あったかな。

「報告では聞いていたが、これほどとは……。セキュリティがまるでなっていない」

私がお客様用のお茶菓子について考えていると、トモのぼそぼそと呟く声が聞こえた。

「え？ 何か言った？」

問いかけながら視線を彼に向けると、アパートを見上げながらなぜか震えている。

「古い……いえ、歴史があるなと……」

「そう？ ここはまだ築二、三十年だし、そんなに古くないわよ」

実は文化財だった！ というような築数百年のアパートもあるので、うちなんてまだまだ新しいほうだ。だから「え？ ここ？」なんて顔をしないでほしい。

「エレベーターは？」

「そんなものはないわ。でも、こちら辺の治安はいいほうだし、近くにスーパーやバルやパン屋さんもあって、とても便利で住みやすいの」

いいところを伝えながら、軽快に階段を上がって部屋の鍵を開ける。トモは厳しい顔を崩さないまま、ついてきた。

私のお城はそんなにダメ？

会社を経営していて、赤司家と縁談が持ち上がるようなトモには、私の住んでいる部屋は常識外れに見えるのだろう。

私もイタリアに来るまでは、こんなふうに自分の目が行き届く広さの家に住んだことはなかった。だから、内見に来た時は驚いたものだ。が、住めば都。今はとても気に入っている。

私は、かつての自分の価値観を思い出して苦笑いをこぼし、ドアを開けた。トモを家の中に招き入れると、彼が私の手を掴む。

「ご両親はこのセキュリティで、よく許容なさいましたね」

「父には言っていないの。海外で暮らすことは許可してくれたものの、よくは思っていないから……」

いつまでもお嬢様ではられない。

留学資金は膨大なので、さすがに祖父に甘えたが、仕送りを少しでも多く残して貯金ができるように、比較的家賃の安いアパートを選んだのだ。

「トモはセキュリティをすぐ気に入るみたいだけど、別にこの辺は治安が悪くないから心配ないわよ。部屋は少し狭いけど、周辺環境はいいし、それに正直な話……昼間は会社の研究室にいて、夜は寝るだけだから、広さとか別にいらないの。休みの日も外に出ていることが多いし……」

ニコツと微笑み、彼のために紅茶を淹れる。私は二日酔いなので、水だ。飲みすぎた体に冷たい水が染み渡って美味しい。ごくごくと飲んでみると、トモが首を横に振った。

「こんなエレベーターもオートロックもない物件に、貴方を一人にはできません！」

「へ？」

「セキュリティだけでなく、花梨奈さんは今怪我をしているし、階段の上り下りは絶対に大変です」

「いやいや、大丈夫だよ。大した怪我じゃないもん」

「^{ドクタ}ウルスラのお墨つきまでもらっているのに、なぜ彼は心配ばかりしているのだろう。先ほど軽快に階段を上がる私を見ていなかったのだろうか？」

……見えていなかったのかもしれない。だってこの人、ずっとアパートのセキュリティ面ばかりを気にしていたから。

私が大袈裟だと笑うと、彼は厳しい顔でまた首を横に振った。

「花梨奈さん、僕が泊まっているホテルに行きましょう」

「は……いい？」

「幸い、今日からバカンスなんですよね？　しばらくは僕がアパートに通おうと思っていましたが、このアパートを見てしまった以上ここに貴方を置いてはおけません。怪我が治るまでホテルでお世話をさせていただきます。当面の生活ができるように着替えや必要なものを持っていきましょう。あ、それとも新しく買いますか？」

「え……つと」

待つて。待つてほしい。

彼の言葉に理解が追いつかない。

えっと、彼は今なんて言ったの？ 最近、日本語を使っていなかったから、突然日本語で捲し立てられて、私は何かとんでもない聞き間違いをしたんだと思う。

だって家に送ると言っただけの彼が、私をホテルに連れて行こうとするわけない。

「花梨奈さん……」

硬直して動けない私をトモが横抱きにかかえ上げた。驚いてしがみつくと、彼がふわっと笑う。どうして抱き上げるの？

「あ、あの……トモ？」

「いいですか、花梨奈さん。貴方は平気だと思っているかもしれませんが、昨夜も『大丈夫』と言いながら見事に転んで怪我をしました。貴方の『大丈夫』は、まったく信用できません。それに今も二日酔いで体調が悪いんですね？ 貴方はもっと自分の状態を理解したほうがいい」

「う……」

論すように言われて、返す言葉が見つからなかった。

確かに昨夜は派手にすっ転んで怪我をした……らしい。だが、その記憶はない。心配は無用と何度伝えても、昨夜の醜態^{しゅうたい}を見ていた彼からしたら、私はとても危なっかしいのかもしれない。いや、多分そうなんだろう。

答えられずにいると、トモは私をベッドに下ろした。

「今の体調でまた水上タクシーはつらいと思うので、しばらく休んでから移動しましょう。二日酔いに効くものを用意しておきますから、花梨奈さんは眠っていてください」

「で、でも、私たち、昨日会ったばかりだし。いくら貴方の責任感が強くても……さすがにそこまでは甘えられないよ」

この人がすごく責任感が強いのは分かった。それはもう人一倍なのだろう。でも、彼の厚意は受け入れられない。一緒にいる時間が長ければ長いほどバレル可能性が上がってしまう。それは非常にまずい。

焦りを隠しきれない表情でトモを見上げると、彼は優しげに私の頭を撫でた。その彼の手に戸惑いながらも、私はあえて彼の好きな人の話題を振ってみる。

「あ、貴方には、わざわざヴェネツィアに会いにくるほど、すごく好きな人がいるんでしょう？ なら、その人を探したほうがいいよ。み、見つからないにしても私に構っていないで、せっかく来たイタリアを満喫したら？ ね？ 私のことは、もういいから……」

「はい、なら貴方の言う通りにしますね。だから、今は眠ってください」

「……う、うん」

分かってくれたのかな……？

不安げに見ていると、彼は私を手際よくベッドに寝かせて布団をかけ、ポンポンと軽く叩いた。

「おやすみなさい。今は何も考えずにゆっくり休んでください」

「……おやすみ」

そして額におやすみのキスが降ってくる。なぜそんなことをするのかという疑問や驚きよりも、二日酔いがつらくて限界だった私は彼の行動をスルーして、そっと目を閉じた。

「……うん」

なんだか気持ちいい。このベッド、こんなに寝心地よかったかな……

私はふわふわとした意識のまま寝返りを打ち、薄く目を開いた。すると、レースカーテンがそよぐバルコニーが視界に飛び込んでくる。そしてその先に見える海に瞠目した。

「は？ 海？」

飛び起きた瞬間、自分が無駄に豪華な部屋にいることに気がつき、その事実を目を瞬かせた。

「え？ 何？ ここ、どこ？」

足を下ろしてみるとカーペットはふかふかで、置いてある調度品もランクが桁違いだった。宮殿の一室かと見紛う内装は、確実にここがホテルのスイートルームだということを物語っている。私が普段暮らしているアパートと比較するまでもない——おそらく一番ランクの高い部屋だろう。

プレジデントスイートかしら？

私、自分の部屋で寝たよね……どうしてこんなところにいるの？ まさかトモの仕業？ そういえば、ホテルにおいて、とか言っていたわよね？

まさか本気だったのかと頭をかかえながら、ベッドを抜け出した。

「私をここに連れてきたのトモでしょ！ 勝手なことはやめてよね……って、あれ？ いない」

文句を言いながら部屋から飛び出したが、無駄に広いリビングが目に入るだけで彼はいなかった。ほかの部屋かしら？

その後、ダイニングやもう一つのベッドルーム。二つあるバスルームなど——室内を隈なく覗いてみたが、トモはいなかった。

「……あれ？」

私は広いリビングの真ん中で立ち尽くした。

え？ トモの仕業じゃないの？

途端に不安が襲ってくる。

「私、まさか誘拐されたんじゃないよね？」

ポツリと漏れ出た恐ろしい考えを、ないない一笑に付す。

日本でなら考えられたかもしれないが、イタリアで私の素性を知る人はいない。第一、誘拐してきた人をこんなにもすごい部屋に閉じ込めるなんて、普通しないだろう。絶対に犯人はトモだ。やはりそれしか考えられない。

「でも、本当にこの部屋素敵。こんなところに泊まれるなんて、やっぱりトモってすごくお金持ちなのね」

お祖父様と同じくらいかしら？

我が家は夫婦仲どころか親子仲も悪い。さらに父と母方の祖父の仲も悪い。

そのせいか、両親から愛情を向けられた記憶は一切ない。家族旅行をしてホテルに泊まった記憶

がないからか、もしそんなことがあったなら、こんな部屋に泊まれたんだろうかと想像してしまう。やだ。私だったら、あり得ないことを考えるのはやめるのよ。そんなもの、とうの昔に諦めたでしょう。

「あれ？ 起きたんですか？」

「あら、いたのね」

唇を強く噛んだ瞬間、私の思考を打ち切るように背後から声をかけられた。ゆっくりと振り返ると、トモがミネストローネとフォカッチャをのせたトレイを持って立っていた。

「厨房に頼んでミネストローネを作ってもらったんですが……食べられますか？ 本当なら僕が作りましたかたんですが、料理ができないのでミネストローネに入れる食材を選ばせてもらいました。花梨奈さんの体のことを考えて選んだので、食べてくれると嬉しいですよ」

「ありがとうございます」

美味しそうな香りが鼻腔をくすぐって、一瞬お腹が鳴りそうになり、気を引き締めて厳しい顔でトモを睨む。

「あのね、トモ。一体どういうつも……」

「あ、その前にシャワーを浴びますか？」

「は？」

私の抗議の言葉を遮るように、突然シャワーを提案されて顔が強張った。それが分かったのか、トモが慌てて首を横に振る。

「怖がらないでください。大丈夫です。花梨奈さんが考えているようなことはしませんよ。怪我人は余計なことを考えなくて、ゆっくりと療養しましょうね」

彼は柔らかに微笑んで、野菜とお豆たっぷりのミネストローネをテーブルの上に置いた。別にそこは心配していない。彼は人並み以上に責任感が強い人だ。軽傷でも、怪我をしている人を襲うようなことはしないだろう。彼の正義がそれを許さないはずだ。

会ったばかりだが、彼の責任感はずいぶん信頼できる……が、私が初恋の相手とバレたらどうなるか分からないので、本気で気をつけたいと思う。

「……せっかくだし、先にそれをいただくわ」

ミネストローネに罪はないし、帰るのは食べてからでも遅くない。何よりお腹空いた……私がお腹をさすりながら照れ笑いをすると、トモが嬉しそうに私の手を取ってエスコートしてくれた。促されるままリビングのソファに座ると、その横に彼も腰を下ろす。

「ミネストローネは栄養たっぷりですし、疲れた時だけでなく、今日のように体調が良くない時などにもオススメです」

「うん、そうね。ありがとうございます……。すごく美味しそうだね」

「どうぞ食べてください」

私が「いただきます」と手を合わせると、トモがスプーンで一口すくって、あーんと差し出してきた。その行動に顔が引きつる。

「いや、あの……自分で食べられるから」

「貴方は怪我人なんですよ。遠慮しないでください。ほら、あーん」

いやいや、怪我をしているのは手じゃなくて脚だ。食事くらい自分でできる。だが、彼はまったく引き下がってくれなかった。その押しの強い笑みに気圧され、つい口を開いてしまうと、満足げに食べさせてくれる。

スープを口の中に含み、もぐもぐと野菜とお豆を咀嚼すると、彼が破顔した。

「美味しいですか？」

「オイシイデス……」

「それはよかった。たくさん食べてくださいね。あ、フォカッチャもありますよ」

「ありがとう……」

またもやトモが、フォカッチャを一口サイズに千切って私の口に運ぼうとした。その手を制する。「私に構っていないで、トモも食べて。私、まだ介助が必要な年じゃないから……」

「そんなつもりじゃなかったんですが……。美味しそうに食べている花梨奈さんが可愛らしくて、つい世話を焼きたくなって……」

彼の目が優しいげに細められて、私を見つめてくる。その表情が、あまりにも温かく、愛情深くて、一瞬バレているんじゃないかと不安になった。

いやいや、まさかね……

私は焦りを誤魔化すように、ミネストローネの入った器を手で持って、ごくごくと飲んだ。口に入った野菜やお豆をもぐもぐと咀嚼しつつ、スープを飲んでみると、トモが肩を震わせて笑い出す。

「可愛いですね。照れているんですか？」

「照れてない……。そういうのは初恋の人にしてあげればいいと思うわ」

「ふふ、そうですね」

はあ。ちゃんと話して分かってもらわないと……。大体、私はこのバカンスでイタリア各地を旅行するって決めているのよ。高級ホテルでお世話をされている時間なんてない。

どうやってお別れしようかと考えながら、私は空になったミネストローネの器をジッと見つめた。ふうと溜息をつき、真剣な表情でトモに向き直る。

「あの……色々とありがとう。でも、私は本当に大丈夫だから……。ミネストローネ、ご馳走さま。とても美味しかったよ。貴方の優しさや責任感は充分伝わったから、貴方は貴方の時間を有意義に使って、ね？」

私がトモの右手に自分の手を重ね、彼の顔を覗き込んで諭すように言うと、彼は微笑んだまま重ねている私の手にもう片方の手をのせてきた。

「僕にとって有意義な時間の使い方は、花梨奈さんのお世話をすることです。……と言っても、貴方は納得しないのでしょうね。なら、こうしましょう。花梨奈さんは僕に、せっかく来たならイタリアを満喫すればいいと言いましたよね」

「え？ う、うん……」

言われていることの意図が分からず、戸惑いがちにトモを見ると、彼は重ねている私の手に自分の手を絡め、その手を持ち上げてチュッとキスをした。

ひえ……と怯んだ私の腰を抱き、さらに距離を詰めてくる。

「なら、この二週間、イタリアと一緒に巡りませんか？ 僕はイタリアに来たのが初めてで、よく分かりません。だから、案内してください」

「え？ 案内……？」

「花梨奈さんは、このバカンスでイタリアの観光地を巡るつもりだったんでしょ？ なら、ついでに僕のガイドをしてやるくらいの気持ちで、僕の願いを叶えてくれませんか？ もちろん提案したのは僕なので旅費はすべて出します。いえ、出させてください。花梨奈さん、僕にイタリアのいいところを教えてください」

……私、このバカンスの予定をトモに教えたかしら？

疑問に思ったが、何せ昨夜は酔っていたので、きつとお酒の勢いで喋ってしまったのだろう。

どうしよう。断ったほうがいいに決まってるんだけど……断っても、簡単には納得してくれなさそう。

トモの提案について、真剣に考えてみる。

彼は責任感が強いのか、自分の目の前で怪我をした私への罪悪感からなのか……私に構うことをやめるつもりはないらしい。ならば、ガイドをして、昨夜からのお礼を返したほうがいいのかもしれない。もちろんバレないように細心の注意を払って。

一人旅のほうが気楽ではあるけれど、イタリアのいいところを教えって言われたら、なんだか断れない。むしろイタリアの素晴らしさを布教したい、しなければならぬ、というような使命感が

沸々と湧いてくるから不思議だ。

「花梨奈さん、僕は土地勘がありません。土地勘がなければ、自分で動くこともままなりません。どうか、僕を助けると思って」

うう、そんな縄のような目で見ないでよ。

イタリアを巡って得た経験は、今後の彼にとつて良い糧になるはずだ。何より土地勘がないのは可哀想だ。けれど、一緒にいればいるほどバレる可能性も上がる。

今までのお礼をして大好きなイタリアの良さを知ってもらいたいという気持ちと、危険だからやめたほうがいいという思いがせめぎ合う。

「花梨奈さん、僕を見知らぬ土地に放置するんですか？」

「え？ 放置？」

「じゃあ、見捨てるんですか？」

「え？ そ、そんなつもりは……」

私が戸惑うと、「じゃあ、お願いします。僕を助けると思って」と、ずいっと顔が近づく。

そ、そうだよ。これも人助け。人助けなら仕方ないよね……。彼には色々とお世話になっちゃったもの。恩返しは、ちゃんとしないと……

私が仕方ないというような顔で「に、二週間だけだからね」と言うと、喜んだトモが抱きついてきた。

「ちよつと！ ち、近い！ 近いから……」

もう少し離れて……

トモの胸を押すと体を離してくれたが、私の頭を撫でくる。やはりこの人、距離感がおかしい。「嬉しい。すごく嬉しいです。では、さっそく明日から色々と回りましょう。どこから行きますか？」

「え？ えっと……」

そう問いかけると、思考が明日からのイタリア巡りに持っていかれて、トモとの距離が気にならなくなってしまった。彼は考え込みはじめた私の腰を抱いて、体を寄せてくる。

「イタリアはとにかくハズレがないんだよね。期待以上の伝統と驚嘆すべき情景。そしてあふれる情熱！ 何を見てもどこを見ても感動しかないのよ！ でも、二週間で全部は回れないから厳選しないよね……。まずはどこに行こう。うーん……」

「花梨奈さんが当初行く予定だった場所でもいいですよ」

「それはダメよ。初めてならやっぱり王道コースを巡らなきゃ」

イタリアは見どころが多いので、駆け足でも二週間では回りきれない。

大至急、イタリアの魅力を布教するコースを考えなければ。

「うーん、せっかくヴェネツィアにいるんだから、サン・マルコ広場に行こうか？ 広場にはドゥカーレ宮殿やサン・マルコ大聖堂、コッレール博物館なんかもあるから、まずはそこから……」

あと、図書館かな。世界的に見ても随一の古い文献コレクションを保管している国立マルチャーナ図書館は何度行っても垂涎すいぜんものなので、是非案内したい。

私は手を握りしめながら興奮気味に語った。そんな私をトモが楽しそうに見ている。

「可愛い。本当にイタリアが好きなんですネ。嫉妬してしまいそうだ……」

「え？」

そ、そんなに顔に出ていたのかな……

自分の頬を両手で押さえながらトモを見ると、彼はニコツと微笑んだ。

「嫉妬って何よ……」

「そこまで愛されるのが羨ましいってことです」

「なにそれ」

うう。興奮しすぎて油断しないようにしなきゃ。バレたら大変。

でもどうして知られちゃダメなんだっけ？ 貞操が危うくなるから？ いや、彼は別に私の正体を知っても無体なことはいらないだろう。では、父の決めた結婚相手だから？

それが一番大きい理由かもしれない。父の思い通りにはなりたくない。それに彼の手を取れば、結婚して日本に帰ることになる。

それだけは……それだけは、嫌。

私は緩んでしまった気を引き締めて、トモに向き直った。

「も、もう、トモったら。貴方は行ってみたいところはないの？」

「花梨奈さんが行きたいところが、僕の行きたいところです」

「そう？ でもね、トモ。土地勘がないからって、そこまで気を遣わなくていいんだよ。ちゃんと

行きたいところがあったら案内するから……」

「そうですか？　そういうつもりではなかったのですが……。うーん、そうですね。ローマにあるパンテオンに興味があります……。今回の日程でそちらのほうには行けますか？」

私はトモの希望を聞いて、快諾した。

行ける。行けるに決まっている。というか、行こう！

それなら、やはりヴェネツィアからフィレンツェ、ローマの王道コースが一番だろう。その後、ローマの空港でトモと別れればいい。

トモはこのバカンスが終わったら日本に帰るのよね？

視線を向けると、優しい彼の眼差しに見つめられていることに気づく。その表情に胸がざわめいてふいつと顔を背けると、トモが私の髪を梳くように撫でてきた。

「ト、トモ？」

「ああ、すみません。可愛いなあと思ひまして」

「トモったら、そういうのダメだよ」

熱っぽい目で見つめながら私の髪を指ですくい、その髪にキスをする彼から身を振って逃げる。

そして心を落ち着かせるために紅茶をゆつくりと飲んだ。

「どうしてダメなんですか？」

「それは……。変だもん」

「女性を褒めるのは変なことですか？」

「そういうわけではないけど……」

イタリア人に限らず、欧米の人は何かと褒めてくれることが多い。が、それは挨拶みたいなもので、トモのように熱のこもった視線で言ってくる人はいない。

ずっと仕事漬けの毎日を送っていて、気がつくとも二十七歳になっていた。職場に男性はいるが、プライベートでは男性への免疫はないに等しい。実は彼氏いない歴と年齢がイコールだ。

だから、こういう時に笑って受け流したり、気のきいた返しをしたりすることができない。

はあ。トモったら、仮にも好きな人がいるくせに……。その相手の正体が私だって分かっているというところからこんなにも距離が近いんだもの。もしバレてしまったら一体どんな接し方になるのかしら。そこまで考えて、私は首を横に振った。

余計なことを考えるのはよそう。第一、私は名乗るつもりなどない。隠し通すつもりだから、そんな起きもしないことで悩むのは馬鹿げている。

「トモ。優しいのはいいことだけど、そういうのは好きな子だけにしたほうがいいよ。私だからいいものの、ほかの人にしたら誤解されるよ」

「そうですか？」

「そうだよ」

「じゃあ、花梨奈さんだけにすると約束しますね」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

本当に分かっていないのか、分からないふりをしているのか、どっちかしら。

私が困り顔で深く溜息をつく、「ん？」と優しい表情で顔を覗き込まれる。

「ううん、なんでもない……」

まあいいか。

私は深く考えることをやめた。

「……ん？」

なんか眩しい……

リビングが明るく感じて、私はゆっくりと目を開けた。

「今、何時……」

目を擦りながら枕元に置いてあるスマートフォンを手探りで取り、時刻を確認すると午前二時ごろだった。

え？ まさかトモ、寝ていないの？ 観光したいなら早く寝ないといけないのに……

夜更かしはダメだよ、と言おうと思つてリビングへと向かうと、パチパチとノートパソコンのキーボードを叩く音と書類をめくる音。それから話し声が聞こえてきた。

その様子から、仕事をしているのは一目瞭然だった。

あ……そういえば、トモは社長さんなんだよね。

イタリアは現在サマータイムなので、日本との時差は七時間。

日本は今、午前九時ごろというわけだ。あちらの時間に合わせるなら、どうしても深夜に動くことになるだろう。

忙しい中イタリアに来て、そして私の世話を焼いている。そのうえ観光まで……。トモは本当にそれで大丈夫なんだろうか？

私は心配になりながらも仕事をしている熱心な彼の姿に、声をかけるタイミングがはかれず、その場から動けなかった。

高い鼻梁が影を作り、西洋人に引けを取らないくらい彫りが深い。普段は前髪を上げているから見えている額が、今は前髪が下りていて見えない。それが何やら幼さを感じさせて、ドキッとした男の人のなかに、なんて綺麗な顔なんだろう。

わざわざイタリアまで初恋の人を探しに来なくても、彼なら選り取り見取りだろうに……。どうして私にこだわるのかしら。

人は恋をすると、脳内にフェニルエチルアミンを作ることが過去の研究から分かっている。これの働きでドーパミンが過剰に分泌され、興奮状態となり、正常な判断ができなくなるのだ。

だからこそ、仕事が忙しいのにこのようなどころまで来るという無謀なことができてしまうのよ。私はトモを見つめながら、はあっと深い溜息をついた。

トモが私を好き？ こんな綺麗な顔の人が私を？ なんて？

やっぱり脳の錯覚なんじゃないかしら？

彼は一目惚れによる衝動に突き動かされるままイタリアにまで来ておきながら、責任感で私のために時間を割いている。……私が初恋の人だと気づいていないんだから、本当なら私に構っていないでお目当ての人を探しに行くのが普通なのに……

「花梨奈さん？」

ぼうつとそんなことを考えていると、声をかけられてハッとする。気がつくとも目の前にトモがいた。彼は優しい目で見ている。

「すみません、起こしてしまいましたか？」

「ううん、大丈夫。それより仕事忙しいんだよね？　なら、私と観光しないで帰ったほうが……」

「仕事や会議はパソコンがあればできますし、何も問題はありませんよ。それに僕が二週間いないくらいで揺らぐほど、うちの会社はやわじゃありません。花梨奈さんは心配しなくても大丈夫ですよ」

「そうなんだ……」

まあ、そうよね。周到に準備して、問題がないようにしてから来るわよね。

私が納得していると、「それに、うちの社員は皆有能なんですよ」と言いながら、彼の手が私の頬を撫でた。その彼の手には、不覚にも心臓の鼓動がいつものリズムを乱す。

トモの手つきが優しい。彼は出会ってからずっと宝物みたいに私に触れる。そうされると、私はどうしていいか分からなくなってしまうのだ。

まだ出会ったばかりなのに、どうして貴方は私の心を掻き乱すの？

それは……父が決めた政略結婚の相手だと分かっているからだろうか。彼に自分の正体がバレないように……と考えているから胸がざわつくの？

その戸惑いを隠すように、私はふいと視線を逸らした。

「花梨奈さん。もう寝ないと、朝起きられなくなりますよ」

「それはこっちのセリフだよ。トモは寝ないの？」

「僕はもう少ししたら寝ます。楽しみにしているのは僕も同じですから、ちゃんと眠るので安心してください。それとも、おやすみのキスが必要ですか？」

「え？　ちよつと待っ……」

トモは私の制止も聞かずに顔を近づけてくる。

彼の行動に胸がドキドキして一気に赤面した。私が顔を真っ赤にして慌てて目を瞑ると、額にキスが落ちてくる。

「おやすみなさい、よい夢を」

「……っ」

私は唇でなかったことに胸を撫で下ろしながら、彼から大きく距離を取った。

「私、もう寝るから……。おやすみ。トモもほどほどにして寝るんだよ」

「はい、おやすみなさい」

私は逃げるようにベッドルームに飛び込み、けたたましく鼓動する心臓の音に気づかないふりをして、ベッドへ潜り込み、きつく目を閉じた。

「う……寝坊した……」

翌朝、目が覚めると午前九時だった。気怠^{けだる}げにベッドから体を起こして隣を確認したが、だだっ広いベッドには私一人しかいなかった。

トモはもう起きているのかしら？

そこまで考えてハッとする。

いやいや、ここではなくてもう一つのベッドルームで眠っているんだよ。付き合ってもいない男女が同じベッドで眠るなんて、あり得ないもの。

トモがあのような調子なので、つい同じベッドで眠っていると勘違いしてしまったけれど、ベッドルームは二つあるのだからそんなわけない。

彼の雰囲気は吞まれている自分が馬鹿みたいで、私はバルコニーから差し込んでくる陽の光をぼんやりと見つめた。

余計なことを考えて高鳴った胸を塗り替えてくれるくらい美しいオーシャンビューだ。

「おはようございます」

景色を眺めていると、トモが私の隣に腰掛け、髪を梳くように頭を撫でてくる。寝起きの顔のまま、ゆつくりと彼を見上げる。

「よく眠れましたか？」

見惚れるくらい美しい微笑を浮かべる彼に、昨夜のように心臓が大きく跳ねる。私は彼の胸をやるわりと押した。

「おはよう。でも少し近いよ……。ちよつと離れて……」

「昨日言ったでしょう？ 花梨奈さんだけにするって……」

「は……い？」

彼はそんなことを言いながら、私の頭に鼻をすり寄せてくる。

いや、昨日のはそういうつもりで言っただけじゃないんだけど……

うまく伝わらなかったことに溜息をついて、視線を下げた。が、下を向いた顔はすぐにすくい上げられてしまう。

「どうしました？ まだ眠いですか？ 朝食を食べられますか？」

気遣わしげな彼の視線とかち合って、私は少し困ったように笑った。

もうこの距離の近さは諦めたほうがいいのかも知らない。そもそも、この人にはパーソナルスペースというものがなさそうだし……こういう人だと考えたほうが気楽だろう。

「えっと……大丈夫。それよりも先にシャワーを浴びようかな」

「一人で浴びられますか？ 何か手伝いましょうか？ あ、傷口を濡らさないほうがいいですよね？」

「平気よ。昨夜も問題なく入れたのを知っているでしょう？」

私は大きく首を横に振った。

怪我は本当に大したことない。そりゃ派手に転んだせいで見た目は痛々しいし、実際まだ痛いけれど、濡らしてはいけないほどひどくもない。

「でも、まだ眠いんでしょう？ うっかりバスルームで転んだら……」

「転ばないわよ」

シャワーを手伝うという言葉に微塵^{みじん}も疾^{やま}しさを感じさせない純粋な表情で小首を傾げるトモに、私は顔を引きつらせた。

おそらく彼は、私のことをとんでもないドジだと思っているのだろう。

あの日は飲みすぎたゆえの失敗なのに……引きずらないでよ。

「転んだりしないし、シャワー浴びている途中に寝ちゃったりもしないから」

「それならいいんですけど、何かあったらすぐに呼んでくださいね」

「はいはい」

なんだろう、とても複雑な気分だ。彼にとつて私は……ドジを通り越して、入浴介助が必要に見えるんだろうか……。もしかして突然肩や腰を抱くのは……実は距離が近いのではなくて、私が突然転ばないようにとの配慮？

あ、そうかも。なんだ、ドキドキして損した。

私はトモの行動について、無理やりそう解釈した。

ふふ、やっぱり高級ホテルは違うわね。

私はバスルームに入り、お湯の溜まったバスタブを眺めて、ほうと息をついた。

広いバスタブに、しっかりとした水回りの設備。もちろんトラブルなんてまったくくない。

「感動！」

イタリアに住んで長いが、昨夜初めてお湯に浸かり、お風呂が快適だと思った。もう泣きそうなくらい嬉しかった。

お風呂好きとしては、自宅にバスタブがなく、お風呂でリラックスタイムが楽しめないのはちよつと、いや、実はかなり寂しかった。それが我が家の唯一の不満だ。

私は顔を綻^{ほころ}ばせて、シャワーのハンドルをひねってお湯を出した。肌に温かいお湯が流れ落ちていくのが、気持ちいい。

髪を洗い終わったあと、鼻歌まじりにシャワーオイルを手に取り、体に馴染ませて洗っていく。

オイルなので泡立ちは少なめだが、とろみがあるので洗い上がりがしっとりしていて好きなのだ。それにイタリアの気候では、こちらのほうが私の肌に合っている気がする。

「ああ！ ゆっくりお風呂に入れるなんて幸せ！」

私はシャワー後バスタブに入り、立ち上がったまま嬉しさのあまり万歳をした。すると、泡風呂になる入浴剤を入れていたからか、先ほどのシャワーオイルを充分に洗い流せていなかったのか——つるりと滑ってしまった。

あ！ と思ったのと同時に、私はお湯の中に沈んだ。その時、バスタブの縁に頭をぶつけ、しま

いにはバスタブの底にも腰を打ちつけた。その音がバスルーム内に大きく響く。

「いったあ！」

うう、やつちゃった……

これでは、さらに私の言う『大丈夫』が信用してもらえなくなる。

「あーあ。髪も顔も泡だらけになっちゃった」

私が顔についた泡を拭おうとした時、バンッとバスルームの扉が開いた。

「花梨奈さん！　すごい音がしましたけど、大丈夫ですか!？」

「きゃあああつ!!」

とても焦った表情のトモが勢いよく飛び込んできて、私はバスルーム中に響く悲鳴を上げた。

どうして、どうして入ってくるの!？」

トモは私の混乱をよそに濡れるのも気にせず、膝をついて私の頬に触れる。その表情はなんだかつらそうだった。

「勝手に入ってしまったてすみません。大きな音がしたので心配だったんです。やっぱり転んだんでしょう？　怪我はしていませんか？　ご友人の病院に行きますか？」

「あ……」

私はハッとして自分の口元を手で覆った。

彼は疾しい気持ちなんて微塵もなく、心配して来てくれたのに悲鳴を上げるなんて……

「広い風呂にはしゃいでしまったせいで、滑っちゃったの。怪我をしたわけじゃないから病院に

は行かなくて大丈夫よ。心配をかけてごめんなさい」

我ながら愚かすぎて恥ずかしい。

申し訳なさからトモの顔を見られず、俯きがちに「ごによ」と答えると、彼が私の顔を覗き込んでくる。

「本当に？　すごい音でしたよ？　腰とか頭とか打っていませんか？」

う……するどい。

「ちょ、ちよつとだけ。でも、本当に大丈夫だから」

「そうですか？　それならいいんですけど……」

彼は私の顔や髪についた泡をタオルで拭ってくれながら、ホッと安堵の息をついた。そして、お湯の温度を確認してから立ち上がる。

「体が冷えないようにゆつくり温まってから出てきてくださいね」

「うん。ありがとう……」

バスルームの扉が閉まり、トモの姿が見えなくなつてから、私は自分の胸元を押さえた。心臓が激しく鼓動している。それに顔も熱い。

泡風呂のおかげで見えていなかったと思うけど、当然ながら私は裸だ。

私ったら、トモの前で醜態をさらしてばかりだわ。そりゃ支えが必要な危なっかしい人に見えるだろう。もっと気をつけなければ。

私は一気に上がってしまった体温を下げるために、あえて冷水を浴びてからバスルームを出た。

「花梨奈さん、元気がありませんね。まだ気にしているんですか？ それとも、やっぱりぶつけたところが痛むんですか？ 今日には観光はやめにして、ホテルで休みますか？」

「え？ ううん。本当になんでもないから、そんなに気にしないで」

いけない、いけない。今日はサン・マルコ広場に行つて色々見て回るつもりなのに、バスルームでのごばかりを気にしていたらダメだわ。

入浴後、彼は気遣わしげに私の体調を窺いながら髪を乾かしてくれる。

「あ、ここにたんこぶができていますね。やっぱりひどくぶつけてしまったんですね」

「平気よ……」

「やせ我慢をしないでください。ほら、ほかにどこをぶつけたんですか？ 見せてください」

「えっと……腰を少し……」

そのあと、どれだけ大丈夫と言つても許してもらえずに、打ちつけた腰に湿布を貼られてしまった。湿布とか本当に介護……いや看護されているみたいだ。

トモに手を焼かせてばかりの自分が情けなくてたまらなかったが、髪を乾かしながら梳いてくれる彼の手つきや腰に湿布を貼ってくれる手が気持ちよくて、つい甘えてしまった。

トモつて包容力あるわよね……

本当に出会つてからというもの、至れり尽くせりだ。

まるでお姫様みたいに扱われているように錯覚してしまう。けれど、トモの前でよく転んでいるせいか、献身的に介護されているような心持ちにもなるので、手放しでは喜べない。

……トモの恋人になる人は幸せだろうな。

そこまで考えて、私は唇を引き結んだ。

一瞬、私が貴方の探している初恋の人だよ、と言つてしまいたくなつてしまった。

でも、トモは二週間経てば日本に帰る。私はイタリアで働いているし、あの父がいる日本には絶対に帰りたくない。

だから、私たちは結ばれない運命なのだ。

この二週間で好きになつてしまわないように気をつけないと。そうしないと、お別れがつらくなる。

これは善意。ある意味、ドジな私への介護みたいなものなんだと自分に言い聞かせた。というより、出会つてまだ数日なのよ。落ち着きなさい、私。勘違いをしてはダメ。

「頭のたんこぶや腰以外には、怪我や痣あざになつているところはなさそうですね」

己の弱い心を叱咤しちたしていると、トモがほかに打ち身や怪我がないかを確認してくれる。

「本当にもう痛くないから……心配しすぎだよ」

「分かりました。では花梨奈さん、手を」

「……ん」

差し出されたトモの手を取ると、彼はいたわるように私を支え、リビングへと連れて行ってくれた。

「足元に気をつけて、ソファに座ってください」

「う、うん。ありがとう」

「花梨奈さんはイタリアンのほうが好きですか？ 僕は朝は和食のほうがよくて……和食を用意してもらったんですが大丈夫ですか？」

彼はそう言つて、テーブルの上の食事に視線を向けた。

そこには、ほかほかのご飯に、鮭の塩焼きに豆腐の味噌汁。ほうれん草のお浸しや漬け物なんかもあった。久しぶりの和食にごくりと喉が鳴る。

「もちろんよ。和食って定期的に食べたくなるのよね。すぐく嬉しいわ。ありがとう」

「それならよかった。では、これを食べたらサン・マルコ広場に行きましようか？」

「うん！」

そう言つて微笑んだトモの視線があまりにも眩しくて、私は高鳴る胸を誤魔化すように照れ笑いを浮かべ、「いただきます」と手を合わせた。

私たちは朝食のあと、サン・マルコ広場に向かった。ヴェネツィアのシンボルなだけあって人が

多く、どこことなく皆が高揚しているように感じる。

ここはいつ来ても賑やかで、楽しい気分になれる。何回来ても自然と心が浮き立つから不思議だ。トモが軽く内に巻いてくれた胸まであるオリブグリーンの髪を揺らしながら、隣にいる彼の顔を笑顔で見上げる。

繋いでいる手に力を込めるトモの様子から、彼も気分が高揚しているのが伝わってきて、私は嬉しくなった。

「さて、どこから見て回りましょうか？ 花梨奈さんのオススメはどこですか？」

「そうだね……」

優しい目に細めながら問いかけてくれるトモに、私は「全部」と言いたいところをぐっと控えて広場をぐるりと見回した。すると、装飾的な彫刻が施された白い列柱が、二段、三段と回廊になって広場を取り囲んでいる様子が目に飛び込んでくる。まさに圧巻だ。

えっと……広場の南側はアドリア海。真正面には堂々たるサン・マルコ大聖堂。その手前に聳えるのが大鐘楼^{だいしょうろう}。やっぱりまずは大鐘楼かな……。展望台にもなっているし、まずはヴェネツィアを眼下におさめて、どれほど素晴らしい街なのかを実感してもらいたい。

「次は冬に来て、浸水したサン・マルコ広場も見てみたいですね」

「あー……そうだね」

見て回る順番を考えていると、トモが広場を見つめてそう言ったので、私は気のない返事をした。確かにその現象は、秋から冬にかけてよく起きる。いわゆるアックア・アルタというやつだ。

ヴェネツィア名物ではあるが、その時期は長靴や冠水時のハザードマップのチェックが必須なので、わりと大変だ。もう慣れたけれど。

「初めて体験すると右往左往しちゃうけど、水面に映るサン・マルコ広場は美しくて感慨深いものがあるよ。特にそこに夕日が重なりとさらにね。もしチャンスがあったら、その時期にまたヴェネツィアに来てみるというよ」

その時は隣にいてあげることができないけれど……

嬉しそうに笑って頷くトモに、作り笑いを向ける。

水に浸かつていなくとも、ここで見る夕日は美しい。朝や日中とはまったく違ったノスタルジックな景色は——言葉を失うほどに素晴らしいので、今日はまずその光景を目に焼きつけてもらいたい。彼の想いに応えられない私が唯一できるのは、イタリアの良さを伝え、いい思い出を作ってあげるだけだから。

そんなことを考えていると、トモの声が耳^じだを打つ。

「あ、花梨奈さん。ドウカール宮殿の見学にはシークレットツアーがオススメだとネットに書いてあったので申し込んでおいたんですが、それで間違いありませんでしたか?」

「え? もちろん間違いなんてないよ! ありがとう、とても嬉しいわ!」

忘れてた!! シークレットツアーは通常のコースでは見ることができない場所を見学できる。宮殿を見学するなら断然シークレットツアーなのに、失念していたとはショックだ。

ガイドを任されたのだから、もっとしっかりしなければと、私は真剣な表情でトモに向き直った。

「そのシークレットツアーは何時から? まだ時間があるなら、その前に大鐘楼を見に行きましよう」

「ええ、是非」

アドリア海を渡る風に吹かれながら、ヴェネツィアの空に突き立ち、堂々と街と人々を見下ろしている——まさにシンボルと呼ぶに相応しい鐘楼。ヴェネツィア観光には絶対に外せない。

私は挽回するように張り切って、トモを大鐘楼に案内した。

「この大鐘楼はヴェネツィアのシンボルの存在なんだよ」

どこからでも見えるので、ヴェネツィアに来たばかりの時は何度も助けてもらった。迷子になった時はこの大鐘楼を目指せばいいと言うと、トモが大鐘楼を見上げた。

「確かに堂々としていて、シンボルというのは納得ですね」

そう言いながら彼は、なぜか私の腰に手を回す。

どうして彼はスキンシップがこうも激しいのだろうか。出会ったばかりだというのに……。やはり私が転ばないように支えているつもりなのかしら。

「花梨奈さん、ではこちらへ……」

トモは皆が吸い込まれていく入り口を指差しながら、私をエスコートするように歩き出した。私の腰を抱いたまま、エレベーターに乗り込む。彼の手から逃げようとすると、「人が多くて、はぐれてしまったら大変ですよ」と言っで一層密着してくる。そのせいか、エレベーターの上昇がとても遅く感じた。